

vol.

12

Sep.2021

市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI



地中レーダー探査の対象となった塚（No.13遺跡）と周辺の畑

上の写真は柴崎町四丁目にあるさわのいなり沢稲荷の様子を撮影したものです。沢稲荷の建つ小山は長らく古墳なのではないかと言われていましたが、根拠となる資料が明らかになっておらず、その詳細は不明でした。

第12号では、令和3年度に刊行予定の先史部会の調査報告書『立川市域の古墳時代』に先駆けて、調査成果の一部をご紹介します。この調査報告書のメインとも言えるのが、地中レーダー探査と呼ばれる非破壊の遺跡調査です。沢稲荷は古墳なのかどうか、実際の調査風景を交えながら詳しくお伝えします。

「資料をよむ」では「アメリカ資料にみる砂川闘争」と題し、昭和30年（1955）に起こった基地拡張問題、いわゆる「砂川闘争」に関する日本側と米国側双方の動きを、米国側の資料から考察します。

目次

・第4期・立川市史編さん委員会委員.....	2	・令和3年4月～令和3年9月活動報告.....	11
・部会短信.....	3	・資料・情報提供のお願い.....	11
・部会特集（先史部会）立川市の古墳時代をさぐる.....	4～7	・立川写真館.....	12

連載

・立川おっこぼれ話「神社と古墳」.....	2
・資料をよむ アメリカ資料にみる砂川闘争.....	8～10



第4期・立川市史編さん委員会委員

立川市史編さん委員会は、市長の諮問機関として設置され、市史編さんに関する基本的な事項について審議します。このたび、第4期の立川市史編さん委員会が始まりました。任期は令和3年9月1日から2年間です。

職名	氏名	所属等
委員	大友 一雄	国文学研究資料館名誉教授
委員	小林 尚子	公募による市民
委員	白井 哲哉	筑波大学図書館情報メディア系教授
委員	杉山 章子	公募による市民
委員	鈴木 功	前立川市文化財保護審議会会長
委員	豊泉 喜一	立川市文化財保護審議会会長
委員	榑崎 茂彌	多摩戦時下資料研究会
委員	保坂 一房	たましん地域文化財団歴史資料室長
委員	和田 哲	立川市文化財保護審議会委員

※委員長・副委員長は、今後開催予定の編さん委員会会議にて決定（敬称略・委員は50音順）

立川おっほれ話

神社と古墳

都内の遺跡分布状況を示した東京都遺跡地図には500基近い古墳が登録されています。その中には、No.13遺跡（沢稲荷、柴崎町四丁目）や武蔵府中熊野神社古墳（府中市）のように、古墳と神社とが密接に結びついている事例があり、しかも、稲荷塚古墳（多摩市・世田谷区など）や狐塚古墳（目黒区・世田谷区など）、蛇塚古墳（台東区）、亀塚古墳（狛江市）のように、カミサマや神使の名前を冠した塚が古墳であることも珍しくありません。もちろん、

近世に造られたと考えられる富士塚（富士見町一丁目）のような事例もあるため塚すなわち古墳とみなすことは短絡的ですが、古墳が後世に信仰の場として整備されることは珍しくなかったと言えるでしょう。

なぜ古墳が信仰の場として整備されるようになったのかということについては、日本民俗学の創始者として知られる柳田國男の説が一般的です。柳田は、「山の名と塚の名と共通している」事例、「塚の名と神様の名とに、幾つも共通な」事例があることを指摘し、「天然に存在する嶺も、人工によって成ったところの一丈二丈の塚も、信仰上共通の要素を有しておったと想像することができる」と述べています（柳田1918）。「塚は一種の祭場」であり、「古墳が何のために築かれたかが忘れられてしまった場合に、新しい土を封じて塚をつくるよりは簡便であるがゆえに、古墳をあたかも天然の小山かのごとくに見、その頂を祭壇に使うのは、きわめて自然な事」であったと考えていました（柳田1912・1918）。

（鳥越）



▲沢稲荷の初午の様子（平成30年（2018）2月撮影）
写真提供：小川力氏

柳田國男 1912「塚と森の話」（『柳田國男全集15』1990 ちくま文庫）

柳田國男 1918「民俗学上における塚の価値」（『柳田國男全集15』1990 ちくま文庫）



部会短信 (令和3 (2021) 年度前期)

先史部会

先史部会では、昨年度に引き続き刊行物3冊の編集を進めています。1つ目の『資料編 先史』は700ページ近い大冊となる予定です。2つ目の『大和田遺跡第1・3・4地点出土資料 再整理報告書』では、これまでの調査では知られていなかった写真資料が見つかるなどの成果も得ることができました。中でも、昭和29年(1954)に行われた第1地点の調査ではカラーリバーサルフィルムが使われており、考古学史的にも貴重な資料となりました。3つ目の『立川市域の古墳時代』では、市域の古墳についての最新の調査成果をまとめています。詳しい内容は今号の部会特集をご覧ください。

大和田遺跡第1地点の調査風景
(立川市歴史民俗資料館所蔵)

古代・中世部会

来年度以降に予定している報告書刊行に向けて、感染対策を徹底したうえで、市内外の寺院や研究機関での石造物・文献調査を進めています。数年にわたり調査を行ってきた普濟寺の国宝六面石幢については、近年の科学技術の進化により、3D計測による立体的な形状の画像を作り出すことができました。六面石幢は、延文6年(1361)に作られた大変歴史のある石造物のため、長年の雨風によって表面の摩耗や劣化がみられます。今回の3D計測調査によって写真や拓本では判読が難しかった銘文などが復元できました。また、文献調査も千葉県木更津市・松戸市、茨城県日立市、東京都板橋区にある寺院で実施しました。



普濟寺六面石幢の3D計測調査風景

近世部会

『資料編 近世2』の刊行に向けた調査を本格的に開始し、立川市歴史民俗資料館、国文学研究資料館、武蔵村山市立歴史民俗資料館で史料調査を行いました。『近世2』には砂川地区の史料を掲載する予定です。

砂川の村々は全て近世に開発された新田村落で、他村から開発・入植した人々によって村が形作られていきました。その過程を明らかにすることが『近世2』の課題の一つとなります。

古い史料の情報をお持ちの方は市史編さん係までご一報いただくと幸いです。

殿ヶ谷新田の入植者が名主と交わした証文
(塩野家文書、市史編さん係所蔵)

近代部会

令和5年度刊行予定の『資料編 近代1』の準備を進め、掲載する資料を選び、原稿化する作業を行っています。市史編さん係に寄贈された資料の整理・撮影や立川市歴史民俗資料館での調査を行いました。緊急事態宣言発令等のため外部機関での調査の一部は控えました。

3月末～6月の市史編さん展示では市の公文書を取り上げ、近代の立川村・砂川村の成り立ちや、立川飛行場と周辺のまちづくりの一端を紹介しました。立川飛行場の図面写真や、立川駅前の水害対策のための立川排水路(緑川)工事の資料写真を展示し、公文書の歴史資料としての実例を伝えました。



市役所での展示風景

現代部会

昨年度から引き続き、市が保管する公文書を中心に、『資料編 現代2』の刊行に向けて調査を進めており、市議会関係の資料から市の各部署が作成した公文書へと、調査対象を広げつつあります。

各部署の資料には、議会の資料よりも細かな経緯のわかる文書が多く含まれています。例えば、都市計画の簿冊には、まちづくりが進められていく過程の調査・立案・折衝など、さまざまな資料が存在します。3月から6月まで開催された市史編さん展示では、立川駅周辺の変化を航空写真で紹介しましたが、公文書等を手がかりに、こうした身近な景観の変遷を次の資料編で探っていきます。

立川基地跡地関連地区市街地再開発事業
(現：ファール立川)の完成予想鳥瞰図
(「再開発事業補助要望調書」平成3年より)

民俗・地誌部会

新型コロナウイルス感染症の影響でさまざまな行事が中止となり、民俗調査を行うことが十分にできていませんが、今年度にはいって、少しずつ、調査活動を再開しています。この夏には、松明作りを見学させていただいたり、一部では個別の聞き書き調査を行ったりしています。また、これまでの活動の中で収集してきた刊行物・未刊行物や調査時に撮影した写真などのデータ分類と目録整理作業を進め、デスクワークによる資料整理も継続しています。感染状況やワクチン接種の状況及び市民の方々のご意向にあわせ、調査活動を徐々に正常化させていきたいと考えています。



豊泉編さん委員による松明回しの実演

立川市の古墳時代をさぐる

先史部会では、立川市の旧石器時代から古墳時代（3世紀後半～7世紀頃）までを調査しています。立川市には、向郷遺跡・大和田遺跡という縄文時代中期の集落遺跡があり、とりわけ向郷遺跡は、多摩地域を代表する環状集落遺跡として広く知られています。平成31年（2019）3月に刊行された『向郷遺跡 竹内勇貴氏寄贈資料 調査報告書』は、昭和45（1970）～52年（1977）頃に向郷遺跡で採集されて昭和57年と平成3年頃に市に寄贈されたものの、長らく未整理だった資料を調査した報告書です。今年度は、古墳時代の調査報告書として『立川市域の古墳時代』を刊行します。多摩川流域の古墳の位置や年代などを網羅的に調査する地理分析や、立川市でこれまで発見された古墳時代の遺物の調査、古墳の測量などの調査を行いました。今号では、その成果の一部を紹介します。

立川市と古墳

立川市No.13・16遺跡（柴崎町四丁目）は多摩川を臨む台地にあり、共に崖線に近い場所に位置しています。このあり様は、多摩川流域の古墳分布状況と合致します。立川市教育委員会編（1957）『立川市教育資料 第1集』には、No.16遺跡では、古墳時代後期と考えられる石室が発見されたとあります。現在も塚が残るNo.13遺跡では、ボーリング調査によって石室が確認されたともあります。このようにNo.13遺跡周辺には古墳があった可能性があるものの、詳しい調査資料はすでに失われており、立川市の古墳は長らく実態が不明でした。

そこで先史部会では、古墳の可能性が高いNo.13遺跡を中心に調査を行い、令和元年9月に地中レーダー探査を実施しました。（鳥越）



がいせん 崖線：川の流が長い年月をかけて台地を削ってできた崖の連なり。崖の際は水源が豊富な反面、水害に遭いやすい場所でもあります。

古墳ってなに？

古墳は、土や石を積んで造られた塚状のお墓（墳丘墓）で、3世紀後半から7世紀頃までのものを指します。古墳には大王から地方の有力者までが葬られていました。世界文化遺産である大仙陵古墳（大阪府堺市）のような大型の前方後円墳だけでなく、数メートル規模の小型な古墳も多くみられます。古墳の形や大きさの違いは、葬られた人が持っていた権力の大きさや権力を及ぼすことのできた範囲に由来すると考えられています。都内には500基近い古墳が確認されており、そのうち約7割が多摩川流域（主に日の出町～大田区）にあります。立川市がある多摩川中流域では、5世紀末～6世紀に古墳群が展開するようになったと言われていす（江口2010）。

代表的な古墳の形と例



円墳
奈良県奈良市
富雄丸山古墳
（直径約110m）など



方墳
千葉県印旛郡栄町
龍角寺岩屋古墳
（一辺約78m）など



前方後円墳
大阪府堺市
大仙陵古墳
（墳丘長約486m）など



古墳は小高い丘のような見た目をしていものもあり、木々が生き茂っている場合も多く、一見すると古墳だと気づかないことも多いです。

立川市に古墳はあるのか

～物理探査が明らかにする先史の立川～

先史部会副部会長 青木 敬

立川市には古墳が存在しないのか

立川市を挟むように位置する国立市と昭島市には古墳群が分布しており、立川市にも3基の古墳があるとされています。しかし、詳しい調査資料が失われている、すなわち当時の調査とその成果を正確に検証することが困難なため、立川市には古墳がないものとして扱われることがありました。

今回、新編立川市史編さん事業に伴い、先史部会では、考古学的な調査から立川市内の古墳の有無を明らかにすることを目標の一つに掲げました。そこで古墳として言い伝えられている地点を中心に市内を踏査し、古墳の可能性が高いと判断した遺跡を調査することにしました。

平成28年（2016）11月に市内を踏査した結果、柴崎町四丁目に所在する立川市No.13遺跡（以下、No.13遺跡）が古墳の有力な候補に浮上しました。現在のNo.13遺跡は、塚状の高まりの上に沢稻荷の社殿が鎮座していますが、この高まりが古墳の墳丘とよく似ています。さらに沢稻荷は、古墳がつくられる地形的立地環境にも合致することから、古墳の可能性が高いと考えたのです。



▲立川市No.13遺跡（沢稻荷）全景

掘らずに調べる方法

さて、考古学の発掘調査は、掘ってみなければわからない貴重な情報が数多く得られるいっぽう、掘ることで遺跡を破壊してしまいます。No.13遺跡は、沢稻荷として今なお地元の人々の崇敬を集める信仰の場として大切にされてきました。学術調査とはいえ、信仰の対象を発掘調査するのは困難です。このように発掘調査がむずかしい場合、古墳である手掛かりを得る方法はあるのでしょうか。

一般的に古墳には、墳丘を取り囲む溝（周溝）が設けられ、墳丘内部には遺骸を安置した石室がつけられたはずですが、そこで、発掘調査せずにその存否を明らかにする手段として候補にあがったのが、非破壊の物理探査でした。



▲塚上にまつられている沢稻荷（正面部分）



沢稻荷：柴崎町四丁目にある稲荷神社。沢は昔の地名で、沢稻荷は沢の中心に位置しています。二月に開催される初午の祭りは三日間かけて行われ、現在神事は諏訪神社の神主が執り行っています。右の写真は平成30年の初午の様子（小川力氏撮影）。

外見だけではわからない身体内部の異常を発見するため、私たちが病院でレントゲン撮影やCTスキャンをするのと同じく、遺跡でも見えない地下に何が眠っているのか、物理探査によっておおよそ推測ができます。そのため、発掘調査前や発掘調査中に物理探査を実施し、どこかの地下にいかなる遺構が眠っているか事前に把握することがよくあります。われわれは、そこに着目したのです。

一口に遺跡調査における物理探査といっても、地中レーダー探査、電気探査、電磁探査など複数の方法があり、遺跡や遺構の特徴に応じて探査の方法を使い分けます。今回のように古墳に伴う地中の施設を調べるには、高周波の電磁波を地中へ放射し、反射の状態から地下の様子を探査する地中レーダー探査が最適と判断しました。

地中レーダー探査によるNo.13遺跡の調査

以上の経緯をふまえ、先史部会では沢稲荷の氏子さんや地権者のみなさまの同意を得て、まず平成30年2月にNo.13遺跡全体を測量しました。つぎに測量成果にもとづき、令和元年（2019）9月に沢稲荷と隣接する畑で地中レーダー探査を実施しました。



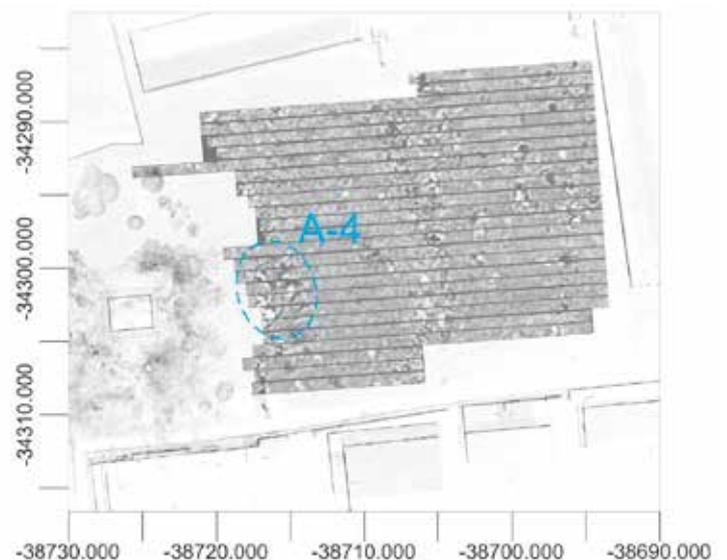
▲No.13遺跡における地中レーダー探査の様子

探査した結果、畑と塚状の高まりとの境界付近で溝らしき落ち込みを捉えました。

図1をご覧ください。平面図の左側が沢稲荷と塚状の高まりですが、その右のグレーで覆われた範囲が地中レーダー探査を行った部分です。A-4（水色で囲ったところ）に窪みが捉えられました。さらに図2では、A-4付近のレーダーが捉えた反応を東西方向の断面で示しましたが、地表下70cmに窪みの上端、1.7mで窪みの底らしき反応があります。この溝は円弧を描くように塚状の高まりに沿うこと、溝の大きさなども加味すると、立川市周辺古墳で普遍的に認められる周溝の可能性が高いと判断しました。そうすると、No.13遺跡の塚状の高まりは、古墳の墳丘である可能性が一層高まってきます。



地中レーダー探査では、電磁波を地中に照射し空洞や埋設物に由来する反射波形（異常反応）を捉えることで地中の様子を探ります。調査地の状況に応じて探査機材の大きさなどを選択するため、事前調査が欠かせません。また、深くなればなるほど反応を細かく捉えることは難しく、現状では地下2～3mまでが限度です。さまざまな波形が組み合わさっているため（図2）、データの解析には十分な経験が必要です。



▲図1 No.13遺跡東側における地中レーダー探査結果（平面・地下1.8m、図の上が北、機材は東から西へ移動）

探査成果を反映させた測量図が図3です。復元すると墳丘直径20.8m、高さ1.5m以上、周溝外周径24m、周溝幅2m、深さ1mと、周辺の古墳の規模と比較しても大型の部類に属することが判明しました。

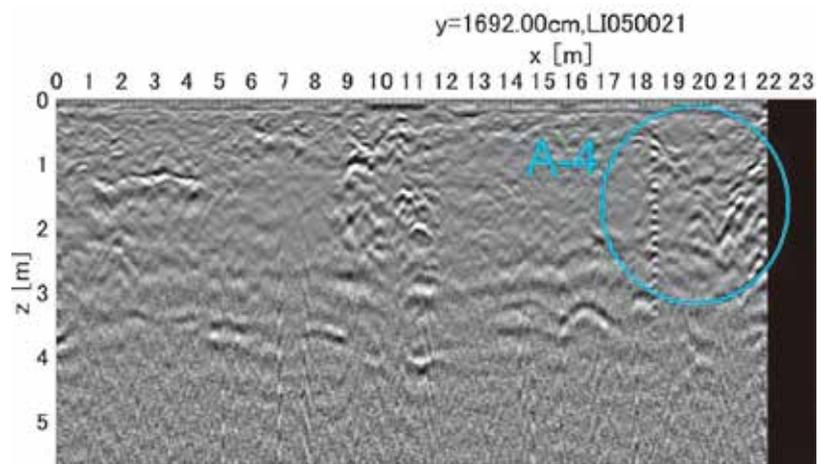
かつてNo.13遺跡の地下をボーリング調査した結果、石室の一部とみられる石材を確認したとの記録が残っています。調査結果が残っておらず詳細は不明ですが、この記録が正しければ、高まりの中に遺骸を納めた石室が存在することになります。高まりが墳丘で、周囲に周溝がめぐり、墳丘内部に石室が存在する可能性が高い、以上の3点からNo.13遺跡は古墳と判断してよいでしょう。

みえてきた古墳群

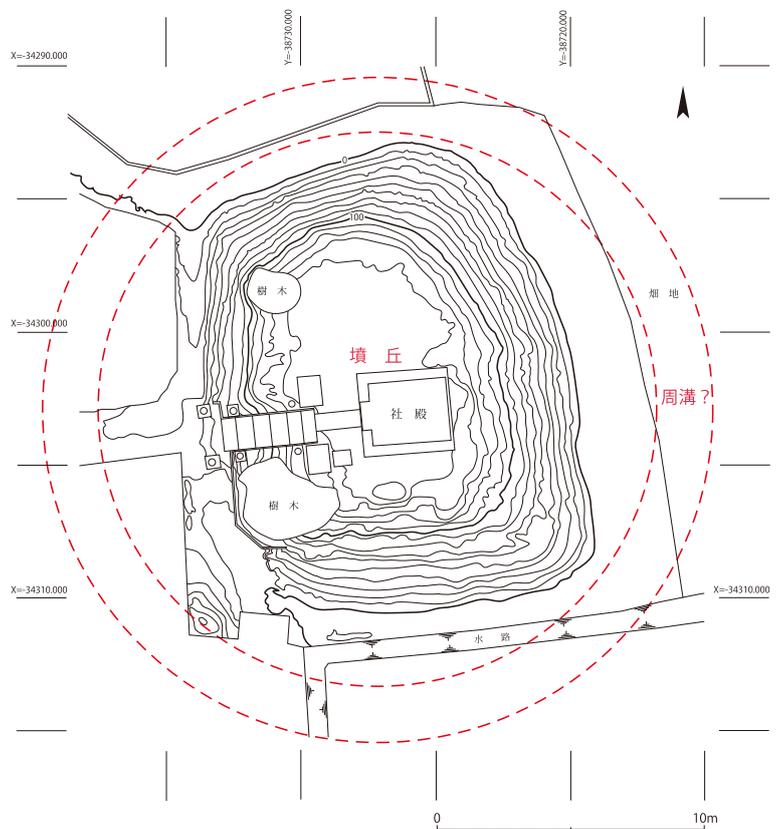
実はNo.13遺跡だけでなく、近隣でも地中レーダー探査を実施し、古墳の埋葬施設あるいは周溝らしき窪みを複数確認しました。かつてNo.13遺跡の近所を発掘調査したところ、別の古墳の周溝と推定される溝が検出されたこともあります。これまでの言い伝えや調査所見などを総合すると、柴崎町四丁目一帯には何基も古墳が点在していた、つまりここに古墳群があった可能性が高まってきました。

なお、ここで紹介した古墳調査の詳細は、今年度刊行予定の『立川市域の古墳時代』（新編立川市史 調査報告書 先史編3）に掲載されます。立川市域や多摩川流域の古墳時代をより深く知りたい方は、こちらもあわせてご参照ください。

今回、その存在が浮かび上がってきた柴崎町四丁目一帯の古墳群、ここでは柴崎古墳群と仮称しますが、今後調査が進んでいくと、今まで謎のベールに包まれていた立川市の古墳を解き明かす鍵が得られることでしょう。古墳時代の立川地域を支配した有力者の実像や、人々がどのような暮らしを営んでいたのか、郷土立川の歴史を明らかにするためにも、柴崎古墳群の実態解明が進むことを願ってやみません。



▲図2 No.13遺跡東側における地中レーダー探査結果（A-4付近の東西方向の断面）。青線で囲ってある範囲の上方、逆台形状の断面が周溝と推定される部分の反応



▲図3 探査成果にもとづくNo.13遺跡の墳丘と周溝の復元

先史部会では、今年度にもう1冊の報告書である『大和田遺跡第1・3・4地点出土資料 再整理報告書』を、来年度に『新編立川市史 資料編 先史』を刊行する予定です。『資料編 先史』は先史部会が平成27年度から行ってきた調査の集大成であり、立川市域の考古学的な成果を俯瞰すべく編集を進めています。報告書と併せてお手に取っていただければ幸いです。

大和田遺跡発掘調査の様子▶
(昭和29年(1954)
立川市歴史民俗資料館所蔵)



資料をよむ

アメリカ資料にみる砂川闘争

現代部会特定部会委員 栗田尚弥

はじめに

1955（昭和30）年3月、米極東軍は、日本政府（鳩山一郎内閣）に対し、ジェット爆撃機の発着のためとして、立川、小牧、横田、木更津、新潟の5飛行場の拡張を要求しました。

5月4日、東京調達局は、東京都北多摩郡砂川町（現・立川市）に対し、非公式に基地拡張に伴う土地収用を通告します。これに対し、5月8日には、砂川町基地拡張反対同盟が結成され、同12日には、砂川町議会も基地拡張反対を議決し、「挙町一致」で基地拡張反対体制がとられることになりました。ここに、有名な砂川闘争が開始されることとなります。

その後、三多摩地区労働組合総評議会を中心に砂川町基地拡張反対労働組合協議会も組織され（9月5日）、当時盛り上がりを見せていた原水爆禁止運動とも連携を深めていくこととなりました。そして、ついに9月13日、基地拡張のための強制測量が警官隊の厳重な警護のもと実施され、これに反対する地元住民と彼らを支援する労組、学生約5,000人と警官隊が衝突する事態が発生しました。

ここに紹介する資料は、現在アメリカの国立公文書館に所蔵されており、日本の国立国会図書館にもそのマイクロフィルムが所蔵されているアメリカ統合参謀本部と国務省の資料のなかから、翻訳され、『新編立川市史 資料編現代1』（以下『現代1』）に収録されたものの一部であり、飛行場拡張の理由、反対運動側の動き、日本側当局者の動きや発言についてアメリカ側の見解が述べられています。



▲基地拡張反対運動の拠点となった「団結小屋」や日本山妙法寺砂川道場の周辺に集まった人びとの頭上で、着陸態勢に入る米軍機。1956年頃。石川俊雄氏撮影、立川市歴史民俗資料館所蔵。

ニュールック戦略と飛行場拡張計画

1953年7月の朝鮮戦争休戦成立後、アメリカ大統領ドワイト・D・アイゼンハワーを待っていたのは、戦時中の軍事費拡大を原因とする膨大な財政赤字でした。アイゼンハワーは、アメリカ財政健全化のために、軍の大幅な機構改革と軍事費の削減に乗り出しました（いわば軍のリストラ化）。しかし、時代ははまだ東西冷戦下にあり、朝鮮戦争の再燃など「熱い戦争」勃発の可能性がなくなったわけではありませんでした。アイゼンハワーは、米国防政の健全化と東側陣営に対する抑止力の維持という、相矛盾する課題をともに遂行する必要に迫られたのです。

▼資料1

レムニツァー極東軍司令官からテイラー参謀総長への書簡（1955年8月19日、抜粋）（注1）
Records of Joint Chiefs of Staff, Part 3, 1954-1960, 『現代1』資料番号344から一部字句修正

極東空軍飛行場拡張計画

A、極東空軍の最新のジェット機への機種変更計画は、滑走路の拡張計画が完成するまで実行できないし、機種変更計画が失敗すれば、既知の事実である最近の共産主義側の空軍力の脅威に対して対抗できなくなるということは、強調されるべきである。このことは、日本の置かれた立場への脅威となり、極東の地政学的なバランスを崩すものである。

B、1954年の初頭、極東空軍司令部は、指定された飛行場の拡張なくしては任務が遂行できない、と米空軍司令部に報告している。この観点から、日本の吉田〔茂〕首相が米国を訪問した際、ワシントンには、〔当時の〕極東軍司令官（〔ジョン・E・〕ハル大将）が極東軍にとっての最優先課題は滑走路の拡張であると考えている、と吉田に伝えた。吉田が帰国した後に、総選挙が実施され、〔鳩山一郎民主党政権〔のちに保守合同で自民政権〕となり〕日本政府によってこの件はさらに遅延させられることになった。

〔中略〕

地元の反対－日本政府はこれをおうにか克服しようとしているが－によって、日米合同委員会から一時的に測量権を与えられた測量隊が測量のために〔拡張予定敷地内に〕入る権利が妨げられている。特に横田、新潟、立川では当初から測量が阻止されている。日本の防衛上不可欠なものであるから、この問題を早期に解決することは緊急を要する課題である。

注1…翻訳は筆者による。資料には原注を（ ）、訳注を〔 〕で示した。以下同じ。

この二律背反する課題を解決するために、アイゼンハワーがとった政策がニュールック（New Look）戦略と言われるものです。ニュールック戦略とは、抑止力として効果が大きく、戦争時には大きな打撃を与える核兵器とその輸送手段の開発と配備を進める一方、通常戦闘部隊の兵力（特に陸軍）を合理化するというものでした。広島・長崎に原爆を投下したB29爆撃機を見ればわかるように、航空機は当時核輸送手段の最たるものでした。ニュールック戦略にとって、東側のソ連や中国、北朝鮮に近い日本の飛行場整備は焦眉の課題でした。また、軍用機の大型化、ジェット化に対応するためにも、飛行場の拡張、近代化は必要とされました。1955年8月19日、米極東軍のレイマン・L・レムニツァー司令官は米参謀総長マックスウエル・D・テイラー大將宛ての書簡のなかで、日本国内の軍用飛行場拡張の必要について語り、同時に砂川での事態の進展に対して懸念を表明しています（資料1）。

アメリカ側当局者から見た反対運動

では、アメリカ側当局者は砂川住民の反対運動をどのように見ていたのでしょうか。1955年8月27日、レムニツァー極東軍司令官はテイラー参謀総長に次のように書き送っています（資料2）が、ここからは、住民運動の高まりに対するあせりと日本政府の対応に対する不満、さらに日本労働組合総評議会（総評）の動きに対する警戒心が窺えます。

A、安井〔誠一郎〕東京都知事は、和解のため話し合いを申し出たが、宮崎〔傳左衛門〕砂川町長は8月24日まで安井と会うことを拒否した。宮崎は、自分の意思は既に文章にした通りであり、測量を阻止するために命をかけて戦うつもりである、と芝居っ気たっぷりに報道陣に語った。

B、強い力を持つ日本労働組合総評議会（総評）は、町民側に立って積極的に介入した。他の地区から500人の組合員を砂川に派遣、デモに参加させ測量隊の砂川町への入町阻止を支援した。

C、8月24日、22人の測量隊が砂川町に入ろうと試みたが、1000人の町民と500人の組合員からなる固い壁によって頑強に阻まれた。この日の午後、300人から600人の警官隊——その数は新聞によって幅があるが——によってピケ隊のラインが切断されたものの、測量隊は砂川町に入ることをあきらめた。

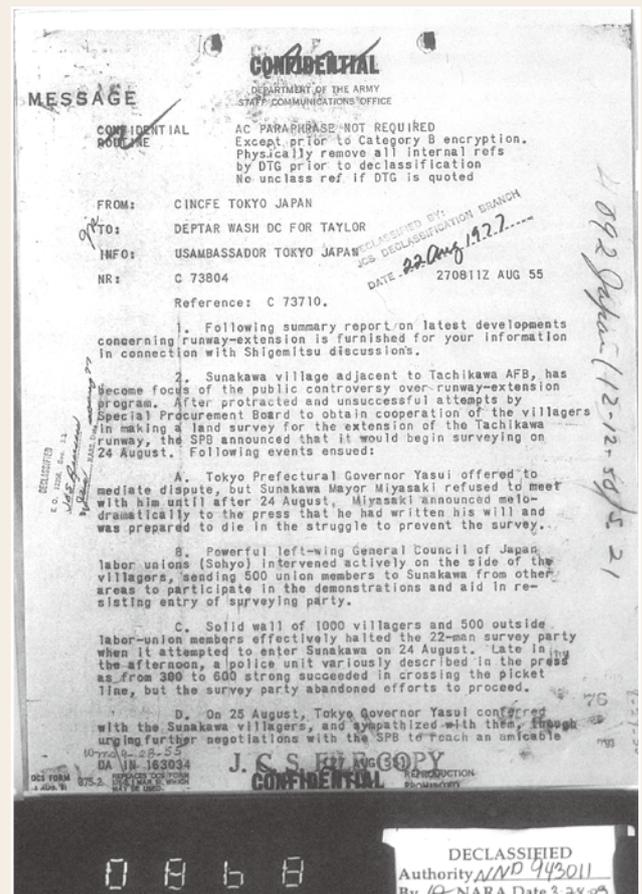
〔中略〕

E、8月27日、日本の新聞によれば、鳩山首相は記者会見において、当初の5飛行場拡張計画から2ないし3の飛行場を除外し、これに代わる場所を見つけることが必要だと思ふ、と語った。彼は特定の飛行場名をあげなかったが、調達庁が代替可能地を調査中であると述べた。この声明は〔砂川町の事態に〕いい影響を及ぼすものではなかったが、滑走路の拡張は、在日米軍にとって必要であるのみならず、自衛隊がジェット機の訓練を実施するためにも必要であり、国民はこのことを理解しなくてはならない、という鳩山のさらなる発言によって、幾分軽減された。この声明は、これまで日本のトップ当局者によって出された大体どの声明よりもはっきりとしたものであった。しかし、遅きに失したものでもあり、声明が出された時には、好ましくならざる多くの事態が生じていた。

F、この間、砂川町民は、安井が理解を示したことで総評の介入に元気づけられたように見える。そして、測量隊がさらに砂川町に入ろうと試みるならば、それが警官隊に守られていようがいまいが、阻止するために3000人のピケ隊を動員すると表明した。

資料2

レムニツァー極東軍司令官からテイラー参謀総長への書簡（1955年8月27日、抜粋）出典同左、『現代1』資料番号346から一部字句修正



資料2の原文。

アメリカ国立公文書館（National Archives and Records Administration=NARA、アメリカ国立公文書記録管理局とも）所蔵、国立国会図書館提供。元は秘密文書であったため、文書の下下にCONFIDENTIAL（機密）の文字が印字されていますが、公開にあたって取り消し線で消されています。画像の下部には国立国会図書館所蔵マイクロフィルムのコマ番号と、NARAでの撮影許可番号が表示されています。

外務官僚 稲垣一吉の積極意見

アメリカ側は、「内閣からの支援なくしては、滑走路拡張計画はまったく頓挫してしまう」（『現代1』資料番号343、Confidential U. S. State Department Special Files, Japan, 1947-1956）と考えていました。しかし、先の8月19日と27日付けのレムニツァー極東軍司令官の書簡からもわかるように、鳩山内閣の対応はアメリカ側（特に軍部）をあまり満足させるものではなかったようです。とは言っても、日本当局者のなかにも、事態の打開を図るべく積極的に動いている人物もいました。外務官僚稲垣一吉（欧米局長心得）もその一人で、1955年8月26日に在日米大使館を訪問した際に、稲垣は、飛行場問題はアメリカのみならず日本にとっても重要な問題であると語り、極東情勢の安定のための日本の再軍備の必要性についても示唆しています。さらに、彼は政府の砂川闘争に対する対応を公然と批判しています（資料3）。

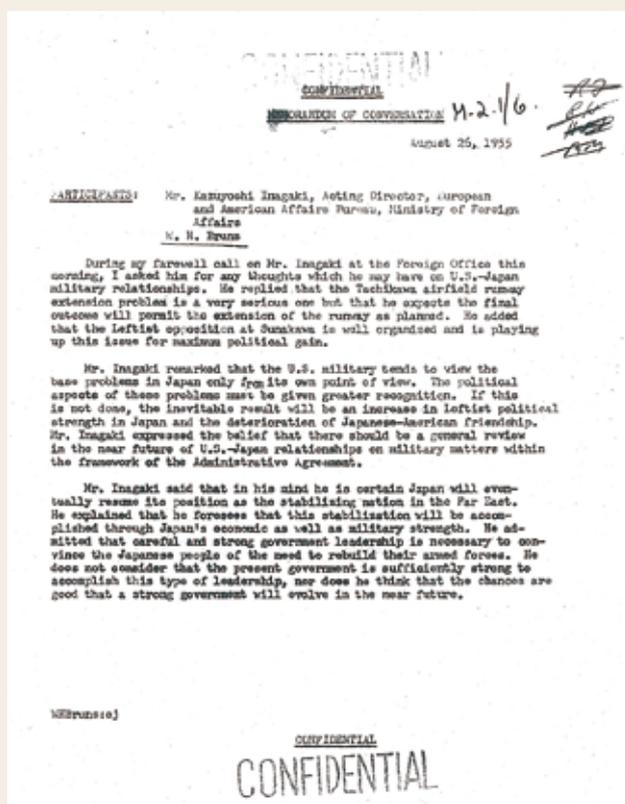
▼資料3

外務省におけるスナイダー米大使館員と稲垣一吉及び福島慎太郎調達庁長官の会談録
Confidential U. S. State Department Special Files, Japan, 1947-1956、『現代1』資料番号345から一部字句修正

〔前略〕私〔リチャード・L・スナイダー米大使館政務官〕は日米関係について如何なる考えを有しているかについて彼〔稲垣〕に質問した。彼は、立川飛行場の拡張問題はゆゆしき問題ではあるが、飛行場は最終的には計画通り拡張ということで決着がつくであろうと見ている、と応じた。さらに彼は、砂川における左翼の反対運動はよく組織化されており、〔左翼は〕この問題を最大限政治的に利用しようであろう、と付け加えた。

稲垣氏は、米軍は日本における基地問題を自分たちの観点のみから見る傾向がある、との意見を述べた。政治的な局面から見た場合、基地問題は、さらにこれまで以上に考えるべき問題を提示しているのに相違ない〔と稲垣は語った〕。これを考慮しないと、日本において左翼が政治的にその力を増大し、日米友好関係が悪化するという結末になるであろう〔と稲垣は続けた〕。稲垣は、日米行政協定で枠組みが定められている日本と米国の軍事関係は、近い将来において一般的な評価を得られると信じているとも語った。

稲垣は、彼自身の考えとして、日本は最終的には極東の安定装置としての役割に復帰するに違いない、と語った。この安定は、経済力同様軍事力の強化によってもたらされると予測している、と稲垣氏は語っている。そして、国民に軍事力の再建が必要であるということを受容させるには、慎重かつ強い政府のリーダーシップが必要である、と付け加えた。〔しかし〕現政府はこの種のリーダーシップを発揮するほど強くはないし、政府が強くなるチャンスも近い将来にはやってこない、と彼は考えている。



▲資料3の原文。

所載・提供は同前。表題に会談覚書（MEMORANDUM OF CONVERSATION）とある通り簡易な記録ですが、正式の公文書として他の文書と同様に保管・公開されています。

むすびにかえて

アメリカ側の資料を見てみると、日本側資料だけではわからなかった砂川闘争のさまざまな側面が見えてきます。たとえば、ここに紹介した資料からだけでも、アメリカ側が飛行場拡張にこだわった理由、アメリカ側が、拡張工事の遅れだけではなく闘争によって日本国内の左翼勢力が勢いづくことも懸念していたこと、日本政府の対応に対してアメリカ側が不満を持っていたこと、日本の官僚層のなかに、米国からの要請という理由だけではなく「日本のため」に積極的に飛行場拡張を推進しようとした勢力があったこと、などがわかります。

ここで紹介したものや『現代1』で紹介したものは、統合参謀本部や国務省の資料のほんの一部に過ぎません。これからさらに、アメリカ側の資料の収集と分析が進めば、砂川闘争のさまざまな姿が明らかになることでしょう。



令和3年4月～令和3年9月活動報告

月	日	活動内容
4月	4日	第1回・近世部会会議
	5日	古代・中世部会・日輪寺（茨城県日立市）調査
	～5日	市史編さん展示企画（立川市役所）
	6日	市史編さん展示企画（立川タクロス）
	～	～6月25日
	11日	第1回・近代部会会議
	16日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
5月	20日	古代・中世部会・徳蔵寺（千葉県木更津市）調査
	22日	近世部会・近代部会・歴史民俗資料館史料調査
	8日	古代・中世部会・大勝院（千葉県松戸市）調査
20日	近世部会・武蔵村山市立歴史民俗資料館調査	

月	日	活動内容
6月	11日	近世部会・国文学研究資料館調査
	13日	第1回・民俗・地誌部会会議
	26日	第1回・現代部会会議
	29日	現代部会・特定部会会議
7月	9日	近世部会・国文学研究資料館調査
	18日	第2回・近世部会会議
	18日	民俗・地誌部会・松明作り見学
	27日	第1回・先史部会会議
8月	5日	第14回・編集委員会議
	25日	現代部会・特定部会会議
	26日	第2回・現代部会会議
	29日	第2回・近代部会会議
9月	25日	第2回・民俗・地誌部会会議



資料・情報提供のお願い

古文書・絵図・地図・写真・地域の年中行事・信仰などの情報をおよせください

市史編さん係では、現在写真資料を特に集めています。古いものであれば、記念写真や個人的な家族写真からでも当時の服装や生活様式を知ることができ、資料として活用できます。

市史の編さんには、市民の皆さまのご協力が不可欠です。ご提供いただける資料やお聞かせいただけるお話がありましたら、市史編さん係までご連絡ください。

■文書、書類、印刷物

江戸時代から令和に至るまでのさまざまな古文書・書類・会誌・記念誌、チラシ・広告などの印刷物

■絵図、地図類、写真、映像、音声

土地の変遷や街並みのわかる絵図、地図類、景観や生活の様子（お祭りなどの年中行事、七五三・結婚式などの人生儀礼、日々の衣食や住まい）などを写した写真や映像、音声など

■地域の年中行事・信仰、ムラのつきあいや慣習など

「念仏を唱える集まりがあった」といったような、昔から続いている慣習についての情報

■石器や土器など考古資料



上図（駅方面を見る）：昭和30年（1955）頃
下図（南を見る）：昭和35年（1960）頃
立川駅南口（現在の南口大通り）の様子を写した写真です。比較すると、道路の舗装や人々の服装、街並みの変化が読み取れます。

市史編さん広報紙 **たちかわ物語** vol.12

令和3年（2021）9月21日発行

発行 立川市

〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

編集 産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん係

〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201

TEL (042) 506-0021 / FAX (042) 525-1601

E-mail chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp

URL http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html

印刷 有限会社立川システム印刷

[市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています]



市史編さんHPはこちら
からアクセスできます。

立川写真館

明治22年（1889）の甲武鉄道（現在のJR中央本線）の新宿－立川間開通を機に、娯楽を求めて遠方からも多くの人々が立川へやってきました。この頃に人気を集めたのが多摩川の屋形船です。

「屋形船 一昭和初期の丸芝館の鮎漁 多摩川河原から立川方面を眺む一」



上図右図ともに板谷寿子氏所蔵写真
右図は昭和4年（1929）頃の丸芝館支店と日野橋



この写真は、かつて立川にあった鮎料理専門の料亭・丸芝館（現錦町・日野橋付近）の、昭和初期の屋形船の様子を取めたものです。

娯楽の少なかった時代、多摩川は水浴びや釣り客でにぎわう夏の代表的なレジャースポットでした。中でも明治から昭和初期にかけて、屋形船に乗って涼を感じながら鵜飼いの鮎漁を見学し、とれたての鮎を味わうことは、贅沢な休日の過ごし方として立川以外の人々からも人気を集めていました。

写真の背景を見ると、河原には小屋が建っており、別の屋形船と多くの人影があるのがわかります。この小屋は船の待合スペース兼鮎の調理場だったそうです。

写真の右下には竹製の蛇籠（竹で編まれた円筒型などの籠の中に石をつめたもの）が見えます。蛇籠は水の流れをコントロールしたり、大雨や台風などで河原が削られて土壌が流出するのを防ぐためのものです。

当時の鮎漁や屋形船についての詳細は、立川市教育委員会『立川市史下巻』（1969）や同『多摩川と生活－魚と伝統漁法－』（1980）をご覧ください。

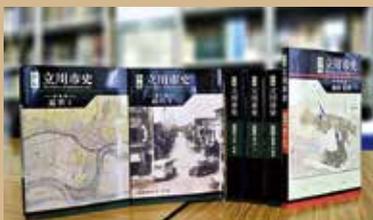
写真を探しています！

現在、市史編さん事務局では**明治から昭和30年頃の写真**を特に探しています。お心当たりがある方は是非市史編さん事務局へお知らせください。

- ・風景（街並み・建物・道路など）
- ・地域や学校の行事（お祭り・運動会・集合写真など）
- ・農業、生業の様子や当時の暮らしの様子ができるもの

刊行物紹介 新編立川市史刊行物は各種好評発売中です。

頒布場所：立川市役所本庁3階市政情報コーナー、立川市歴史民俗資料館、オリオン書房ノルテ店、ジュンク堂書店立川高島屋店



新編立川市史 資料編

古代・中世	B5判・カラー口絵16ページ・本文約600ページ・上製本・価格2,500円
近世1	B5判・カラー口絵16ページ・本文約600ページ・上製本・価格2,500円
近代2	B5判・カラー口絵8ページ・本文約580ページ・上製本・価格2,500円
現代1	B5判・カラー口絵4ページ・本文約580ページ・上製本・価格2,500円
柴崎の民俗	B5判・カラー口絵8ページ・本文約540ページ・上製本・価格2,500円
地図・絵図	A4判・フルカラー・約200ページ・上製本・DVD付・価格3,000円